

【翻訳】

章学誠『校讎通義』訳注（七）

卷三「漢志諸子第十四」（中）

文教大学目録学研究会訳注

（向嶋成美・樋口泰裕・渡邊大・荒川 悠・
宇賀神秀一・王連旺・小田健太・角祥衣）

本稿は、章学誠『校讎通義』の訳注である。今号では、卷三の「漢志諸子第十四」全三十三条のうち、第十一一条から第二十三条までを訳出する。樋口が担当した。前号に引き続き、底本には、葉瑛『文史通義校注』（中華書局、一九八五年）を用い、あわせて、嘉業堂本、劉公純標本の『文史通義』（古籍出版社、一九五六年、中華書局新一版、一九六一年）、葉長清『文史通義注』（無錫国学專修学校叢書、一九三五年）、王重民『校讎通義通解』（上海古籍出版社、一九八七年、傅傑導読、田映曦注本、上海古籍出版社、二〇〇九年）、劉兆祐『校讎通義今註今訳』（台湾学生書局、二〇一二年）などを参照した。

キーワード…校讎通義 章学誠 漢書藝文志 諸子略 諸子

漢志諸子第十四

【原文】

陰陽二十一家、與兵書陰陽十六家、同名異術、偏全各有所主、敍例發明其同異之故、抑亦可矣、今乃缺而不詳、失之疎耳。^{〔注二〕}第諸子陰陽之本敍、以謂「出於義和之官」、數術七種之總敍、又云「皆明堂義和史卜之職也」。^{〔注三〕}今觀陰陽部次所敍列、本與數術中之天文五行不相入、是則劉、班敍例之不明、不免後學之疑惑矣。蓋「諸子略」中陰陽家、乃鄒衍「談天」、鄒奭「雕龍」之類、空論其理、而不徵其數者也。^{〔注四〕}「數術略」之天文曆譜諸家、乃「泰一」、「五殘」、「日月星氣」、以及「黃帝」、「顓頊」、「日月宿曆」之類、顯徵度數、而不衍空文者也。^{〔注五〕}其分門別類、固無可議。惟於敍例、亦似鮮所發明爾。然道器合一、理數同符。劉向父子校讎諸子、而不以陰陽諸篇付之太史尹咸、以爲七種之綱領、固已失矣。^{〔注六〕}敍例皆引義和爲官守、是又不精之咎也。莊周「天下」之篇、敍列古今學術、其於諸家流別、皆折衷於道要。^{〔注七〕}首章稱述六藝、則云「『易』以道陰陽」、是「易」爲陰陽諸書之宗主也。使劉、班著略、

於諸子陰陽之下、著云源出於「易」、於「易」部之下、著云古者掌於太卜、則官守師承之離合、不可因是而考其得失歟。^{〔注八〕}至於義和之官、則當特著於天文曆譜之下、而不可兼引於諸子陰陽之敍也。劉氏父子精於曆數^{〔注九〕}、而校書猶失其次第、又況後世著錄、大率偏於文史之儒乎。^{〔注十〕}

右十四之十一

【訓読文】

陰陽二十一家、兵書の陰陽十六家と、名を同じくして術を異にし、偏全各、主とする所有り、叙例其の同異の故を發明すれば、抑、亦た可なるも、今乃ち缺きて詳らかならず、之を疎に失するのみ。第だ諸子の陰陽の本叙に、以て「義和の官に出づ」と謂い、數術七種の総叙に、又た「皆な明堂義和史卜の職なり」と云う。今陰陽の部次の叙列する所を觀るに、本より數術中の天文五行と相い入れず、是れ則ち劉、班の叙例の明らかならずして、後學の疑惑を免れず。蓋し諸子略中の陰陽家、乃ち鄒衍の「談天」、鄒奭の「雕龍」の類は、空しく其の理を論じ、而して其の數に徴せざ

る者なり。数術略の天文曆譜の諸家は、乃ち「泰一」、「五残」、「日月星氣」、及び「黄帝」、「顓頊」、「日月宿曆」の類、顯らかに度数に徴し、而して空文を行せざる者なり。其の門を分かち類を別にすること、固より議する可き無し。惟だ叙例に於いて、亦た發明する所鮮きに似たるのみ、然るに道器合一、理数共に符す。劉向父子 諸子を校讎し、而るに陰陽諸篇を以て之を太史尹咸に付し、以て七種の綱領と為さず、固に已に失う。叙例皆な義和を引きて官守と為すは、是れ又た精ならざるの咎なり。莊周「天下」の篇に、古今の學術を叙列し、其れ諸家の流別に於いて、皆道要を折衷す。首章に六藝を称述し、則ち「『易』は以て陰陽を道う」と云うは、是れ「『易』を陰陽諸書の宗主と為すなり。使し劉、班の略を著して、諸子陰陽の下に於いて、著して源は『易』に出づと云い、『易』部の下に於いて、著して古は太卜に掌ると云えば、則ち官守師承の離合、是に因りて其の得失を考うる可からざらんか。義和の官に至りては、則ち当に特だ天文曆譜の下に著すべく、兼ねて諸子陰陽の叙に引く可からざるなり。劉氏父子曆数に精たるも、書を校じて猶お其の次第を失うがこ

とく、又た況んや後世の著録、大率文史の儒に偏るか。

右十四の十一

【現代語訳】

陰陽家の二十一家は、兵書略の陰陽類の十六家と、名称を同じくして學術が異なり、部分や全体においてそれぞれに重んじるところがあり、叙例がその異同の理由を明らかにしていれば、さて良いとしても、しかしいまは不十分で詳しくはわからず、疎漏に失している。ひとまず諸子略陰陽家の序に、「義和の官に出る」と述べながら、術数略七種の総序にも、「皆明堂義和史卜の職である」と述べている。いま見てみると陰陽家類の分類に並ぶ書物は、もともと術数略中の天文類、五行類と相容れるものではないのであつて、劉氏、班氏の叙例がはつきりしていないので、後学の疑いを免れていないのである。思うに諸子略中の陰陽家である、鄒衍の「談天」、鄒爽の「雕龍」といった類は、いたずらに理を論じて、度数に証を立てはしないものである。一方、術数略の天文曆譜の諸家である、「泰一」、「五残」、「日月星氣」、そして「黄帝」、「顓頊」、「日

宿曆」といった類のものは、明確に度数に証拠を求め、空虚な文辞を布き広げたりはしないものである。その学術の専門を分かち種類を別にしてしていることは、もとより議論の余地もないことである。ただ叙例において、述べ明らかにすることが少なかつただけのこのように、しかし、道と器は互いに合致し、理と数はしつかりあわさっているのである。劉向父子は諸子を校訂して整理したが、陰陽家の諸篇を太史の尹咸に任せて、数術略七種の綱領としなかつたことが、もともとこの誤りだったのであり、諸子略の陰陽家類と、数術略の叙例でいづれも義和を引いて官守としているのも、精確さを欠いた過ちである。莊周は「天下篇」の中で、古今の学術を述べて列挙し、諸家の学問の流別について、大要をまとめている。はじめの章で六藝について述べ、「『易』は陰陽のことを述べている」と言っているのは、『易』が陰陽の諸書の根本であるということである。もし、劉氏、班氏の目録で、諸子の陰陽家の下に、「源は『易』に出る」と述べ、『易』部の下に、「古は太トに掌る」と述べるようにすれば、官守や伝承の離合について、それによって得失を考えることができる。義

和の官については、ただ数術略天文曆譜類の下に示すべきで、同時に諸子略陰陽家の序に引くべきではない。劉氏父子は曆数に詳しかつたのに、書物を校讎して次第を失つたようであり、ましてや後世の目録になると、編者がおよそ文史の学者に偏っているのであれば知れたものである。

右十四の十一

【訳注】

一 諸子略陰陽家には二十一家三百六十九篇を著録している。序文に、「陰陽家者流、蓋出於義和之官、敬順昊天、歷象日月星辰、敬授民時、此其所長也。及拘者爲之、則牽於禁忌、泥於小數、舍人事而任鬼神。」とある。また、兵書略は兵權謀、兵形勢、陰陽、兵技巧の四類に分かれ、陰陽類には十六家、二百四十九篇、四十卷が著録されている。序文に、「陰陽者、順時而發、推刑德、隨斗擊、因五勝、假鬼神而爲助者也。」とある。「偏全」の語について、宗劉篇に「編書至此、不必更問經史部次、子集偏全、約略篇章、附於文史評之下、庶乎不失論辨流別之義耳。」と見える。

二 注一を参照。『尚書』堯典に「乃命義和、欽若昊天、厯象

日月星辰、敬授人時。」とあり、孔伝に、「重黎之後、義氏

和氏世掌天地四時之官、故堯命之、使敬順昊天。」と言う。

数術略は、天文、曆譜、五行、著龜、雜占、形法の六類からなる。序文に「数術者、皆明堂義和史卜之職也。史官之

廢久矣、其書既不能具、雖有其書而無其人。易曰、『苟非其人、道不虛行。』春秋時魯有梓慎、鄭有裨竈、晉有卜偃、宋有子韋。

六國時楚有甘公、魏有石申夫。漢有唐都、庶得羸犢。蓋有因而成易、無因而成難、故因舊書以序数術爲六種。」とある。

章学誠は「補校漢藝文志第十」第三条においても「数術一略、分統七條、則天文、曆譜、陰陽、五行、著龜、雜占、形法也。」

と述べているように、「陰陽」類を含めて数術略を七類と数えている。なお、五行類には、陰陽の語を書名に含む書物

が多く著録されている。

三 諸子略陰陽家類に「鄒子四十九篇」が著録され、班固自

注に「名衍、齊人、爲燕昭王師、居稷下、號談天衍。」とあり、『後漢書』李賢注所引の「別録」佚文に「鄒衍之所言五

德終始、天地廣大、其書言天事、故曰談天。」と述べられる。また、同じく「鄒奭子十二篇」を著録し、班固自注に「齊人、

號曰雕龍奭。」とあり、『太平御覽』所引「別録」佚文に「鄒奭者、頗采鄒衍之術、迂大而閎辯、文具難勝、齊人美之、

頌曰談天鄒。」と述べられる。

四 数術略天文類には、「泰壹雜子星二十八卷」、「五殘雜變星

二十一卷」、「常從日月星氣二十一卷」（顔師古注云「常從、人姓名也、老子師之。」）がそれぞれ著録され、また、数術

略曆譜類には、「黃帝五家曆三十三卷」、「顓頊曆二十一卷」及び「顓頊五星曆十四卷」、また、「日月宿曆十三卷」がそ

れぞれ著録されている。

五 「漢志」総序に「至成帝時、以書頗散亡、使謁者陳農求遺

書於天下。詔光祿大夫劉向校經傳諸子詩賦、步兵校尉任宏校兵書、太史令尹咸校数術、待醫李柱國校方技。每一書已、

向輒條其篇目、撮其指意、録而奏之。」とある。

六 本章第十条、及び第二十三条を参照。『莊子』天下篇に「古

之人其備乎。配神明、醇天地、育萬物、和天下、澤及百姓、明於本數、係於末度、六通四辟、小大精粗、其運無乎不在。

其明而在數度者、舊法世傳之史尙多有之。其在於詩書禮樂者、鄒魯之士摯紳先生多能明之。詩以道志、書以道事、禮以道行、

樂以道和、易以道陰陽、春秋以道名分。其數散於天下而設於中國者、百家之學時或稱而道之。」とある。

七 『文史通義』易教上に、『周礼』春官の記述に拠りながら、『周

官太卜掌三易之法、夏曰連山、殷曰歸藏、周曰周易。』と述

べる。『周礼』鄭注に「問龜曰卜。大卜、卜筮官之長。」とあり、また、『礼記』曲礼下に「天子建天官、先六太、曰大宰、大宗、大史、大祝、大士、大卜、典司六典。」とある。また、『補校漢藝文志第十』第五条に「陰陽、著龜、雜占三條、當附易經爲部次。」と述べている。

八 『漢書』律曆志に「至孝成世、劉向總六曆、列是非、作五紀論。向子歆究其微眇、作三統曆及譜以說春秋、推法密要故述焉。」とある。

九 王重民『校讎通義通解』は、文廷式『純常子枝語』卷四より以下の指摘を引用している。『漢書藝文志』九流皆略有考見之書、惟陰陽家者流則二十一家之書悉皆亡佚。余嘗推九流之說、蓋皆欲以治天下也。陰陽家者流既與儒道名法並列、則與數術六種之書、必不相類。班孟堅以爲『蓋出於義和之官、敬順昊天、歷象日月星辰、敬授民時』、尋繹其說、則『明堂陰陽一篇』乃古陰陽家之正宗也、『禮記』之『月令』、『管子』之『幼官』、乃陰陽家之遺說也、賈誼之『五曹官制』殆此類也。其廣言之、則以一代之興、必秉五德、由是而有『鄒子終始』、『黃帝泰素』諸書、蓋皆欲以陰陽家言定一朝之制作也、其所以異於兵陰陽家及數術六種者、必緣於此。章實齋『校讎通義』不得其故、奮然改作敘例云、「陰陽家者流、

其原蓋出於易」云云。夫推本於『易』、已大非『漢志』原本官守之義、且如此、則與數術家何別歟。章氏精於目錄之學、何至此懵然不察歟。」

【原文】

或曰、「爽、衍之『談天』『雕龍』、大道之破碎也。今日『其源出於大易』、豈不荒經而蔑古乎。」^{〔注〕}答曰、「此流別之義也。官司失其典守、則私門之書、推原古人憲典、以定其離合、師儒失其傳授、則遊談之書、推原前聖經傳、以折其是非。其官無典守、而師無傳習者、則是不根之妄言、屏而絕之、不得通於著錄焉。其有幸而獲傳者、附於本類之下、而明著其違悖焉。是則著錄之義、固所以明大道而治百家也。何爲荒經蔑古乎。」
一右十四之十二

【訓読文】

或ひと曰わく、「爽、衍の『談天』『雕龍』は、大道の破碎なり。今『其の源は大易に出づ』と曰うは、豈に經を荒らして古を蔑せざらんや」と。答えて曰わく、

「此れ流別の義なり。官司 其の典守を失えば、則ち私門の書、古人の憲典を推原して、以て其の離合を定め、師儒 其の伝授を失えば、則ち遊談の書、前聖の経伝を推原して、以て其の是非を折す。其れ官に典守無く、師に伝習無き者は、則ち是れ不根の妄言にして、屏きて之を絶ち、著録に通ずるを得ず。其の幸にして伝わるを獲る有る者は、本類の下に附し、而して明らかに其の違悖を著す。是れ則ち著録の義、固に大道を明らかにして百家を治むる所以なり。何ぞ為に経を荒らし古を蔑せんや」と。

右十四の十二

【現代語訳】

ある人が、「鄒奭、鄒衍の『談天』『雕龍』といった著作は、大いなる道が破れ崩れたものである。いまあなたが『その源は大いなる『易』に出る』と言うのは、經典をやぶり古を蔑むことになるのではないか」と言った。それに答えて言うには、「これは流別の義である。官司がその掌るところを失えば、私人による学門の書物が、古人による尊ぶべき典籍をたずね、それ

によつてその離合を見定めるものだし、学者がその伝授することを失えば、遊説家のような者による書物が、聖賢の経伝をたずね、そうしてその是非を定めるものである。官司が掌ることなく、学者が伝習することがないようなものは、根本のない妄言であつて、消滅して断絶してしまい、目録に載ることができない。だから、幸いにも伝わることできたものについては、本類の下に附して、しっかりその誤りを著すのである。これこそ目録の意義が、実に大いなる道を明らかにして百家を総べ治めるわけなのである。どうしてそれによつて經典をやぶり古を蔑むことになるだろうか。」

右十四の十二

【訳注】

一 本章第十一条を参照。

【原文】

今爲陰陽諸家作敘例、當云「陰陽家者流、其原蓋出於『易』。」「易大傳」曰、「一陰一陽之謂道。」又曰、「易

有太極、是生兩儀。」^{〔注二〕}此天地陰陽之所由著也。星曆司於保章、卜筮存乎官守^{〔注三〕}。聖人因事而明道、於是爲之演『易』而繫詞^{〔注三〕}。後世官司失守、而聖教不得其傳、則有「談天」「雕龍」之說、破碎支離、去道愈遠、是其弊也。其書傳者有某甲乙、得失如何、則陰陽之原委明矣。今存敘例、乃云「敬順昊天、歷象日月星辰、敬授人時。」^{〔注四〕}此乃數術曆譜之敘例、於衍、奭諸家何涉歟。

右十四之十三

【訓読文】

今陰陽諸家の為に叙例を作れば、当に「陰陽家者流、其の原は蓋し『易』に出づ」と云うべし。「易大伝」に曰わく、「一陰一陽之を道と謂う」と。又た曰わく、「易に太極有り、是れ両儀を生ず」と。此れ天地陰陽の由りて著わる所なり。星曆は保章に司り、卜筮は官守に存す。聖人事に因りて道を明らかにし、是に於いて之が為に『易』を演じて詞を繫く。後世官司守を失い、而して聖教其の伝わるを得ざれば、則ち「談天」「雕龍」の説有りて、破碎支離し、道を去ること愈、

遠し、是れ其の弊なり。其れ伝うる者に某甲乙有り、得失の如何なるかを書すれば、則ち陰陽の原委明らかならん。今叙例を存して、乃ち「敬んで昊天に順い、日月星辰を歴象し、敬んで人時を授く」と云う。此れ乃ち數術曆譜の叙例にして、衍、奭の諸家に於いて何ぞ涉るか。

右十四の十三

【現代語訳】

いまもし、陰陽家たちのために叙例を作るとすれば、「陰陽家の流れは、その源は『易』から出るだろう」と言うべきである。「易大伝」に、「一陰と一陽、これを道と言う」とあり、また、「易に太極があり、両儀を生む」と言う。これは天地が陰陽から生まれたことを言うものである。天体や星曆のことは保章氏に掌られ、卜筮のことは官の職掌として保たれていた。聖人は事象によりながら道を明らかにし、そこでそのために『易』を演繹して言説を附したのであった。後世になり官がその守るべきところを失い、聖人の教えが伝わらなくなったので、「談天」「雕龍」といった言説が

生まれ、教えが崩れてばらばらになり、道からいよいよ遠く離れてしまったことは、その弊害であった。しかし、伝えた者に誰がいて、得失がどのようであるかを著せば、陰陽家の源流は明らかになるであろう。いまは叙例を置いて、なんとも「つつしんで天にしたがい、天体の運行を観測し、つつしんで農耕の時節を授けた」と述べている。これではまったく数術略曆譜類の叙例なのであって、どうして鄒衍、鄒爽の陰陽諸家に関係することであろうか。

右十四の十三

【訳注】

一『易』繫辞伝上。

二『周礼』春官に「保章氏掌天星、以志星辰日月之變動、以觀天下之遷、辨其吉凶。」とあり、同じく「太卜掌三易之法、一曰連山、二曰歸藏、三曰周易、其經卦皆八、其別皆六十有四。」とある。

三『史記』孔子世家に「孔子晚而喜易、序彖、繫、象、說卦、文言。」とある。

四 諸子略陰陽家序。本章第十一条の注一を参照。

【原文】

陰陽家「公禱生終始十四篇」、在「鄒子終始五十六篇」之前、而班固注云、「公禱傳鄒爽『始終』書。」豈可使創書之人、居傳書之人後乎^{〔注二〕}。又「鄒子終始五十六篇」之下注云、「鄒衍所說。」^{〔注三〕}而公禱下注、「鄒爽『始終』。」名既互異、而以終始爲始終、亦必有錯訛也^{〔注三〕}。又「閭丘子十三篇」、「將鉅子五篇」、班固俱注云「在南公前」^{〔注四〕}。而其書俱列「南公三十一篇」之後、亦似不可解也^{〔注五〕}。觀「終始五德之運」、則以爲始終誤也^{〔注六〕}。

右十四之十四

【訓読文】

陰陽家の「公禱生終始十四篇」、「鄒子終始五十六篇」の前に在り、而るに班固注して云う、「公禱 鄒爽の『始終』の書を伝う」と。豈に創書の人をして、伝書の人の後に居らしむ可けんや。又た「鄒子終始五十六篇」の下に注して云う、「鄒衍の説く所なり」と。而して公禱の下に注して、「鄒爽『始終』」と。名既に互いに異なり、而も終始を以て始終と爲すも、亦た必ず錯訛有るなり。又た「閭丘子十三篇」、「將鉅子五篇」、

班固俱に注して「南公の前に在り」と云う。而るに其の書俱に「南公三十一篇」の後に列ぶるも、亦た解す可からざるに似たるなり。「終始五徳之運」を覩れば、則ち以て終始の誤りと為すなり。

右十四の十四

【現代語訳】

陰陽家の「公禱生終始十四篇」は、「鄒子終始五十六篇」の前にあるが、班固は注して、「公禱は鄒奭の『終始』の書を伝えた」と述べている。どうして書物をはじめに著した者を、それを伝えた者の後に置いておくことができようか。また、「鄒子終始五十六篇」の下に注して、「鄒衍の説くものである」と述べつつ、公禱の下に注して、「鄒奭『終始』」とある。それぞれ著者名が異なっている上に、「終始」を「終始」としているのも、必ずや誤りがあるはずである。また、「閭丘子十三篇」、「将鉅子五篇」について、班固はいずれも注して「南公の前の人である」と言っている。しかし、その書物がいずれも「南公三十一篇」の後に並んでゐるのも、また理解しにくいものである。『漢書』郊祀

志に「終始五徳之運」とあるのを見れば、「終始」が誤りであると考えられる。

右十四の十四

【訳注】

一 「終始書」、嘉業堂本は「終始書」に作る。「公禱生終始十四篇」について、班固自注に「傳鄒奭終始書」とあり、『文選』所収「魏都賦」李善注所引「七略」佚文に「鄒子有終始五徳、従所不勝、土徳後木徳繼之、金徳次之、火徳次之、水徳次之。」と述べられる。

二 現行の『漢書』では、章学誠が引く注文は班固の自注としてではなく、顔師古注として見える。

三 「異」字、嘉業堂本は「易」字に作る。『漢書補注』に錢大昭の言を引いて、「案下有『鄒子終始五十六篇』、則此注終始當作終始矣。奭字亦誤、作終始者是鄒衍、非鄒奭也。」と述べる。また、『漢書藝文志条理』に「鄧名世『古今姓氏書辨證』、『公禱氏』、『漢藝文志』有『公禱生終始十四篇』、傳黃帝終始之術。」是原注傳黃帝終始書、今注乃傳寫之誤也。」と述べる。なお、姚振宗の引く『古今姓氏書辨證』は南宋紹興四年に成書した。

四 「丘」字、嘉業堂本は「邱」字に作る。「閭丘子十三篇」

の班固の自注に「名快、魏人、在南公前。」とあり、「將鉅子五篇」の班固自注に「六國時。先南公、南公稱之。」とある。

五 「南公三十一篇」の班固自注に「六國時」と言う。諸書の並び順の問題について、『漢書藝文志条理』には、「按古人之書、多不出本人之手、皆門弟子傳其學者所輯錄。『七略』據其成書之先後爲次、故有似乎雜亂、實則倫貫有敘矣。」と述べ、章氏とはまた異なる見解を示している。

六 『漢書』郊祀志に「自齊威宣時、騶子之徒論著終始五德之運、及秦帝而齊人奏之、故始皇采用之。」とある。

【原文】

「五曹官制五篇」、列陰陽家、其書今不可考。然觀班固注云、「漢制、似賈誼所條。」按『誼傳』、「誼以爲當改正朔、易服色、定制度、定官名、興禮樂、草具其儀法、色尚黃、數用五、爲官名。」^{〔注二〕}此其所以爲『五曹官制』歟。如此則當入於官禮、今附入陰陽家言、豈有當耶。^{〔注二〕}大約此類、皆因終始五德之意、故附於陰陽、然則『周官』六典、取象天地四時、亦可入於曆譜家矣。^{〔注三〕}

右十四之十五

【訓読文】

「五曹官制五篇」、陰陽家に列ぶも、其の書今考うる可からず。然るに班固注して「漢制なり、賈誼の条する所に似たり」と云うを觀るに、按ずるに誼の伝に、「誼以爲く當に正朔を改め、服色を易え、制度を定め、官名を定め、礼樂を興し、其の儀法を草具し、色は黃を尚び、數は五を用いて、官名と爲すべし」と、此れ其の『五曹官制』を爲す所以なるか。此くの如くなれば則ち當に官礼に入るべく、今附して陰陽家の言に入るは、豈に當有らんや。大約此の類、皆終始五德の意に因るが、故に陰陽に附す、然らば則ち『周官』の六典、象を天地四時に取るも、亦た曆譜家に入る可きならん。

右十四の十五

【現代語訳】

「五曹官制五篇」は、陰陽家に並んでいるけれども、その書物はいまでは考えることができない。しかし、

班固が注して「漢制であり、賈誼が立てたもののような」と述べるのを見ると、思うに賈誼の伝記に、「賈誼は、正朔を改め、制服の色を変え、制度を定め、官名を定め、礼楽を盛んにし、儀法をあらかた整え、色は黄色を尊び、数は五を用いて、官職の名称とすべきであると考えた」とあり、これが賈誼が『五曹官制』を著したわけであろうか。そうだとすれば当然官府の礼法の分類に収めるべきであり、いま陰陽家の言説に附随させているのは、適当であるとは言えない。およそこの類の書物は、いずれも終始五徳の意によりながら、陰陽家に附随させており、それでは、『周官』の六典が天地四時にかたどっているのも、数術略暦譜類に入れるのがよいこととなってしまうではないか。

右十四の十五

【訳注】

- 一 『漢書』賈誼伝に「誼以爲漢興二十餘年、天下和洽、宜當改正朔、易服色制度、定官名、興禮樂。乃草具其儀法、色上黃、數用五、爲官名悉更、奏之。」とある。本章第五条を参照。
- 二 官礼について、本章第二条の注二を参照。

三 『漢書藝文志条理』には、「按『漢書』魏相傳、『相數條漢興以來、國家便宜行事、及賢臣賈誼、鼂錯、董仲舒等所言奏、請施行之。又數采『易』陰陽及『明堂』『月令』、奏之曰、『易』曰、『天地以順動、故日月不過、四時不忒。聖以順動、故刑罰清而民服。』天地變化、必繇陰陽。陰陽之分、以日爲紀。日冬至、則八風之序立、萬物之性成、各有常職、不得相干。東方之神太昊、乘震執規、司春。南方之神炎帝、乘離執衡、司夏。西方之神少昊、乘兌執矩、司秋。北方之神顓頊、乘坎執權、司冬。中央之神黃帝、乘坤良執繩、司下土。茲五帝所司、各有時也。東方之卦不可以治西方、南方之卦不可以治北方。春興兌治則饑、秋興震治則旱。明王謹於尊天、慎于養人、故立義和之官、以乘四時、節授民事。臣愚以爲陰陽者、王事之本、羣生之命、自古賢聖未有不繇者也。」此五曹官制、本陰陽五行以爲言、而義和官守所有事、故『七略』入之此門。」と述べられている。

【原文】

于長「天下忠臣九篇」、入陰陽家、前人已有議其非者。
〔注二〕或曰、其書今已不傳、無由知其義例。然劉向『別錄』云、「傳天下忠臣。」〔注二〕則其書亦可以想見矣。縱使其中參入陰陽家言、亦宜別出互見、而使觀者得明其類

例、何劉、班之無所區別耶。蓋『七略』未立史部、而傳記一門之撰著、惟有劉向『列女』、與此二書耳。^{〔注三〕}附於「春秋」而別爲之說、猶愈於攙入陰陽家言也。^{〔注四〕}

右十四の十六

【訓読文】

于長の「天下忠臣九篇」、陰陽家に入るるは、前人に已に其の非を議する者有り。或ひと曰わく、其の書今已に伝わらざれば、其の義例を知るに由無しと。然るに劉向『別録』に、「天下の忠臣を伝う」と云えば、則ち其の書亦た以て想見す可し。縱使其の中に陰陽家の言を參入するも、亦た宜しく別出互見すべし、觀者をして其の類例を明らかにするを得しめん、何ぞ劉、班の区別する所無きや。蓋し『七略』未だ史部を立てず、而して伝記の一門の撰著は、惟だ劉向『列女』と、此との二書有るのみ。「春秋」に附して別に之が爲に説けば、猶お陰陽家の言に攙入するに愈るがごときなり。

右十四の十六

【現代語訳】

于長の「天下忠臣九篇」が、陰陽家に入っていることについては、すでに前人にその誤りを議論する者がある。またある者は、その書物はいまにはもう伝わっていないので、義例を知る術がないという。しかし、劉向『別録』には、「天下の忠臣を伝えて」と述べているので、その書物の内容についても想像することはできる。たとえ書物の中に陰陽家の言説を交えていたとしても、また別出互見すべきで、そうして目録を見る者にその分類を明らかにさせることができる。どうして劉氏、班氏は区別するところがなかったのだろうか。思うに、『七略』ではまだ史部を立てておらず、伝記のジャンルの著述は、ただ劉向『列女伝』と、この書物との二部があるばかりである。「春秋」の部に從えてまた別に説明を加えれば、陰陽家の書物の中に混ざるよりはよいだろう。

右十四の十六

【訳注】

一 班固自注に「平陰人、近世。」とある。「前人」は、王彪

麟などを指すのであろう。『困学紀聞』考史篇に「『藝文志』、于長『天下忠臣九篇』。劉向『別錄』云、『傳天下忠臣』。愚謂忠臣傳當在史記之錄、而列於陰陽家何也。『七略』、劉歆所爲、班固因之。歆漢之賊臣、其抑忠臣也則宜。」とある。また、この王応麟の発言に対するものとして、『漢書補注』に引く陶憲曾の言に「長書今不傳、其列陰陽、自別有意、後人不見其書、無從臆測。王應麟『困學紀聞』乃以此詆劉歆抑忠臣、過矣。」とある。

二 顏師古注所引。

三 『列女伝』は儒家類に著録される「劉向所序六十七篇」に含まれていたと思われる。「劉向所序六十七篇」の班固自注に「新序、說苑、世說、列女傳頌圖也。」と述べられる。「補校漢藝文志第十」第八条を参照。

四 章炳麟は、鄒衍以来、陰陽五行説によつて経義や忠孝を説くことが盛んに行われ、それによつて于長の書が陰陽家に収められていくと述べ、章学誠の理解を批判している。「説于長書」に次のように言う。「漢藝文志、有于長天下忠臣九篇、入陰陽家。自王應麟始發難、章学誠故竺信七略、猶纏纏爲異論、不觀其書、則伊尹、周公在道家、務成子在小説、尙不可知、獨是書耶。若徵驗他書、承意逆志、故確然昭晰也。

古者言忠孝、傳諸五行。淮南子泰族訓曰、『澄列金、木、水、火、土之性、故立父子之親而成家。』斯旣然矣。河間獻王問溫城董君曰、『孝經曰、夫孝、地之義、何謂也。對曰、地由雲爲雨、起氣爲風、風雨者、地之所爲。地不敢有其功名、必上之于天、命若從天氣者、故曰、天風天雨也。莫曰地風地雨也。勤勞在地、名一歸于天、非至有義、其孰能行此。故下事上、如地事天也、可謂大忠矣。土者、火之子也、五行莫貴于土。土于四時無所命者、不與火分功名、木名春、火名夏、金名秋、水名冬、忠臣之義、孝子之行、取之土。土者、五行最貴者也、其義不可以加矣。五聲莫貴于宮、五味莫美于甘、五色莫盛于黃、此謂孝者、地之義也。』董生又曰、『木已生而火養之、金已死而水藏之、火樂木而養以陽、水剋金而養以陰、土之事天竭其忠。故五行者、乃孝子忠臣之行也。五行之爲言也、猶五行歟。是故以得辭也。聖人知之、故多其愛而少嚴、厚養生而謹送終、就天之制也。以子而迎成養、如火之樂木也、喪父、如水之剋金也、事君、若土之敬天也。可謂有行人矣。』自騶衍以陰陽消息、止乎君臣上下六親之施、漢興益著。至董生則比傳經義、以五行說忠臣。今于長書雖放失、擬儀其旨、以是爲根柢、故人陰陽家、無所惑也。輒近若莊存與、劉逢祿、宋翔鳳諸儒、多熹宗宗董生、排劉子駿、浸益譎譎。如于長

所述者、非通觀于董、劉勿能論。諸淺見寡聞、率其胸臆者、則幾于結舌矣。」(『太炎文錄初編』文錄卷一)

【原文】

法家「申子六篇」、其書今失傳矣^{〔注二〕}。按劉向『別錄』、「申子學號刑名、以名責實、尊君卑臣、崇上抑下。」^{〔注三〕}荀卿子曰、「申子蔽於勢而不知智。」^{〔注四〕}韓非子曰、「申不害徒術而無法。」^{〔注五〕}是則申子爲名家者流、而「漢志」部於法家、失其旨矣。

右十四之十七

【訓読文】

法家の「申子六篇」、其の書今伝わるを失う。按ずるに劉向『別録』に、「申子の学は刑名を号し、名を以て実を責め、君を尊び臣を卑しめ、上を崇び下を抑う」と。荀卿子曰わく、「申子は勢に蔽われて智を知らず」と。韓非子曰わく、「申不害は、徒だ術あるのみにして法無し」と。是れ則ち申子は名家者流爲るも、而るに「漢志」法家に部するは、其の旨を失う。

右十四の十七

【現代語訳】

法家に著録されている「申子六篇」について、その書物はいまでは伝わらない。思うに、劉向『別録』に、「申子の学は刑名を号し、名によりながら実を批判し、君主を尊び臣下を卑しめ、上の者を崇め下の者を抑える」とあり、荀子は、「申子は権勢主義におおわれて知の働きを知らない」と述べ、また、韓非子は、「申不害はただ術があるばかりで法は持ち合わせていなかった。」と述べている。これらから申子は名家の流れであるのに、「漢書藝文志」が法家に分類しているのは、その主旨を見誤ったものである。

右十四の十七

【訳注】

一 法家類序文に「法家者流、蓋出於理官、信賞必罰、以輔禮制。易曰、『先王以明罰飭法』、此其所長也。及刻者爲之、則無教化、去仁愛、專任刑法而欲以致治、至於殘害至親、傷恩薄厚。」とある。また、法家類に著録される「申子六篇」の班固の自注に「名不害、京人、相韓昭侯、終其身諸侯不敢

侵韓。」とある。『史記』本伝に「申子之學本於黃老而主刑名。

著書二篇、號曰申子。」と述べ、同じく韓非伝に「太史公曰、

：申子卑卑、施之於名實。」と述べられる。また、張守節正

義所引『七録』佚文に「申子三卷」とある。『隋志』には著

録されず、子部法家類「商君書五卷」の下に「梁有申子三卷、

韓相申不害撰、亡。」と注されているが、両「唐志」に至つ

て「申子三卷」として著録されている。宋代の頃に散逸し、

馬国翰、嚴可均らによる輯本がある。

二 『漢書』元帝紀、顔師古注所引。また、『史記集解』所引『別録』

佚文には「今民間所有上下二篇、中書六篇、皆合二篇已備、

過太史公所記也。」とある。

三 『荀子』解蔽篇に「昔賈孟之蔽者亂家是也。墨子蔽於用而

不知文。宋子蔽於欲而不知得。慎子蔽於法而不知賢。申子

蔽於勢而不知知。惠子蔽於辭而不知實。莊子蔽於天而不知

人。」とあり、楊倞は注して「其說但賢得權勢以刑法馭下、

而不知權勢待才智、然後治。」と述べている。

四 『韓非子』定法篇に「問者曰、申不害公孫鞅此二家之言、

孰急於國。應之曰、：「今申不害言術而公孫鞅爲法。」とあ

り、また、「問者曰、『徒術而無法、徒法而無術、其不可何哉。』

對曰、『申不害、韓昭侯之佐也。韓者晉之別國也。晉之故法

未息、而韓之新法、又生。先君之令未收、而後君之令又下。

申不害不擅其法、不一其憲令、則姦多。』とある。

五 『校讎通義通解』所引王業「校讎通義節駁」には、「史遷云『申

子卑卑、施之於名實。』『申子』之爲名家、信矣。但其學雖

以名爲主、其書必言法較多、故劉班入之法家耳。若如章氏

裁篇別出〔互著〕之法、則『申子』當分人名法兩家、而『韓子』

互見道兵〔法〕二部、是乃班氏所謂『警者爲之、苟鈎鈇析亂』

而已者也。」と述べられている。章学誠の名家と法家に対する

認識は、本章第十九条なども参照。

【原文】

『商君』「開塞」、「耕戰」諸篇、可互見於兵書之權謀

條^{〔注一〕}。『韓非』「解老」、「喻老」諸篇^{〔注二〕}、可互見於

道家之老子經^{〔注三〕}。其裁篇別出之說、已見於前、不復

置論。^{〔注四〕}

右十四之十八

【訓読文】

『商君』の「開塞」、「耕戰」の諸篇、兵書の權謀の

条に互見す可し。『韓非』の「解老」、「喻老」の諸篇、

道家の老子經に互見す可し。其の裁篇別出の説、已に前に見ゆれば、復た論を置かず。

右十四の十八

【現代語訳】

『商君書』の「開塞」「耕戦」の諸篇は、兵書略の権謀家の条に互見するのがよい。『韓非子』の「解老」「喻老」の諸篇は、道家『老子』の書に互見するのがよい。裁篇別出の説については、前に見えるので、改めて論じることはしない。

右十四の十八

【訳注】

一 法家類に「商君二十九篇」が著録される。班固自注に「名軼、姪姓、衛後也。相秦孝公、有列傳。」とある。「隋志」子部法家類に「商君書五卷」を著録し、「旧唐志」は「商子五卷」、「新唐志」は「商君書五卷」を著録する。現行本は、五卷二十六篇。「耕戦」篇は、現行本では「農戦」に作る。軍事について説いた篇としては、他に「戦法」篇、「兵守」篇などもある。

二 法家類に「韓子五十五篇」が著録され、班固自注に「名非、韓諸公子、使秦、李斯害而殺之。」とある。「隋志」では、

子部法家類に「韓子二十卷、目一卷」を著録し、而「唐志」いずれも「韓子二十卷」を著録する。

三 『史記評林』凌約言注に「太史公作史、以老子與韓非同傳、世或疑之。今觀韓非書中『解老』『喻老』二卷、皆所以明『老子』也。故太史公贊中有『皆原於道德之意、老子深遠』之句、則知韓子無非出於老子。」と見える。また、章太炎『國故論衡』原道上に「周秦解故之書、今多亡佚、諸子尤甚。『韓子』獨有『解老』『喻老』二篇、後有說『老子』者、宜據『韓子』爲太傳、而疏通證明之、賢於王弼遠矣。『韓子』他篇多言術、由其所習不純、然『解老』『喻老』未嘗雜以異說、蓋其所得深矣。」とある。

四 「別裁第四」を参照。王重民氏は、本文の所謂「互見」は「別裁」のことであると指摘している（校讎通義通解）。

【原文】

名家之書^{〔注二〕}、當敘於法家之前、而今列於後、失事理之倫敘矣^{〔注三〕}。蓋名家論其理、而法家又詳於事也。雖曰二家各有所本、其中亦有相通之原委也。^{〔注三〕}

右十四之十九

【訓読文】

名家の書、当に法家の前に叙すべきも、而るに今後に列するは、事理の倫叙を失う。蓋し名家は其の理を論じ、而して法家は又た事に詳なり。二家各、本づく所有りと曰うと雖も、其の中に亦た相通ずるの原委有るなり。

右十四の十九

【現代語訳】

名家の書は、法家類の前に並べられるべきであるのに、いま法家類の後に並んでいるのは、事と理の順序を失ったものである。思うに名家は原理を論じ、法家は事象に詳しいものである。二家にはそれぞれ由来するところがあるとはいえ、それぞれのうちに互に通い合う本末があるのである。

右十四の十九

【訳注】

一 名家類について、「漢志」には、七家三十六篇が著録され

ている。序文に「名家者流、蓋出於禮官。古者、名位不同、禮亦異數。孔子曰、必也正名乎。名不正、則言不順、言不順、則事不成。此其所長也。及警者爲之、則苟鉤鈇析亂而已。」とある。また、「補校漢藝文志第十」第十条に「名家之敍録曰、『名不正、則言不順。言不順、則事不成。』著録之爲道也、即於文章典籍之中、得其辨名正物之意、此『七略』之所以長也。又云、『警者爲之、則苟鉤鈇析亂而已。』此又後世著録、紛拏不一之弊也。然則凡以名治之書、固有所以附矣。後世目錄繁多、即可自爲門類。」と述べられる。

二 『史記』太史公自序に「太史公仕於建元元封之間、愍學者之不達其意而師悖、乃論六家之要指曰、『易大傳『天下一致而百慮、同歸而殊塗。』夫陰陽、儒、墨、名、法、道德、此務爲治者也、直所從言之異路、有省不省耳。』」とあり、名家、法家の順に挙げられている。但し、六家を個々に論じていく際には、法家を先に、名家を後に論じている。「漢志」以降に編纂された目録においても概ね法家類の後に名家類を置くのを常としており、「漢志」の並びが後世の著録において固定化していったものと考えられる。

三 晁氏『郡齋讀書志』が、子部名家類に「鄧析子二卷」を著録しながら、その提要の中で「班固録析書於名家之首、

則析之學、蓋兼名法家也。」と述べているのは、「漢志」の著録する並びの意味を考慮しつつ、更に名家に分類される著述に法家的要素を見出した指摘であるという点で、章学誠の認識に似る。また、『四庫提要』は、「名家墨家縱橫家歷代著録各不過一二種、難以成帙、今從黃虞稷『千頃堂書目』例、併入雜家爲一門。」と述べ、名家類を設けないが、従来目録では名家類に著録されていた「鄒析子一卷」を法家類に著録し、その提要の中で、「如令煩則民詐、政擾則民不定、心欲安靜、慮欲深遠、則其旨同於黃老。然其大旨主於勢統於尊、事核於實、於法家爲近。」と述べている。

【原文】

名家之言、分爲三科、一曰命物之名、方圓黑白是也。二曰毀譽之名、善惡貴賤是也。三曰況謂之名、賢愚愛憎是也。尹文之言云爾^{〔注一〕}。然而命物之名、其體也。毀譽況謂之名、其用也。名家言治道、大率綜核毀譽、整齊況謂、所謂循名責實之義爾^{〔注二〕}。命物之名、其源實本於『爾雅』。後世經解家言、辨名正物、蓋亦名家之支別也^{〔注三〕}。由此溯之、名之得失可辨矣。凡曲學支言、淫辭邪說、其初莫不有所本。著録之家、見其體分用異、

而離析其部次、甚且拒絕而不使相通、則流遠而源不可尋、雖欲不泛濫而橫溢也、不可得矣。孟子曰、「諛辭知其所蔽、淫辭知其所陷、邪辭知其所離、遁辭知其所窮。」^{〔注四〕}夫謂之知其所者、從大道而溯其遠近離合之故也。不曰淫諛邪遁之絕其途、而曰淫諛邪遁之知其所者、蓋百家之言、亦大道之散著也。奉經典而臨治之、則收百家之用、忘本源而釐析之、則失道體之全。

右十四之二十

【訓説文】

名家の言、分けて三科と爲す、一に命物の名と曰い、方圓黑白是れなり。二に毀譽の名と曰い、善惡貴賤是れなり。三に況謂の名と曰い、賢愚愛憎是れなり。尹文の言爾か云う。然らば命物の名は、其の体なり。毀譽況謂の名は、其の用なり。名家の治道を言うは、大率毀譽を綜核し、況謂を整齊す、所謂名に循い実を責むるの義なるのみ。命物の名、其の源実には『爾雅』に本づく。後世の經解家の言、名を辨じて物を正す、蓋し亦た名家の支別なり。此に由りて之を溯れば、名の得失辨ず可し。凡て曲學支言、淫辭邪說、其の初め

本づく所有らざる莫し。著録の家、其の体分かれ用異なるを見て、其の部次を離析し、甚しくは且つ拒絶して相通ぜしめざれば、則ち流れ遠くして源尋ぬ可からず、泛濫して横溢せざらんと欲すと雖も、得る可からず。孟子曰わく、「詖辞は其の蔽わるる所を知り、淫辞は其の陷る所を知り、邪辞は其の離るる所を知り、遁辞は其の窮まる所を知る」と。夫れ之を其の所を知る者と謂うは、大道従り其の遠近離合に溯るの故なり。淫詖邪遁の其の途を絶つと曰わずして、淫詖邪遁の其の所を知ると曰うは、蓋し百家の言も、亦た大道の散じ著るればなり。經典を奉りて臨みて之を治むれば、則ち百家の用を収め、本源を忘れて之を釐析すれば、則ち道体の全を失わん。

右十四の二十

【現代語訳】

名家における言葉は、三種に分類される、一つ目は事物に名付ける名であり、方円や黑白といったものがそうである。二つ目は毀誉褒貶する名であり、善悪や貴賤といったものがそうである。三つ目は比擬して叙

述する名であり、賢愚や愛憎といったものがそうである。尹文子がそのように述べている。そうであれば、「命物」の名称が、その本体である。「毀誉」や「況謂」の名称が、その作用である。名家の言説は道を治めるのに、だいたい「毀誉」を集めて考え、「況謂」を整理するもので、それが所謂名称に拠りながら実質を批判する義なのである。「命物」の名は、源はまことに『爾雅』に由来する。後世の経解家の言葉が、名称を明らかにして事物を正すのも、思うにまた名家の支流である。それに従いながら遡れば、名家の得失が明らかにできる。すべての浅はかな学問、枝葉末節の言葉、みだらな言葉、邪な学説というものも、そのはじめにおいて由来のないものはない。目錄家は、その本質が分かれ作用が異なるのを観察して、分類を分かつものであるが、ひどい場合には断絶させて通じさせないとなると、流れが遠くなつて源も尋ねられなくなり、広がり溢れないようにしようとしても、できないのである。孟子は、「偏った言葉には掩われていることを知り、邪な言葉には正しさから離れていることを知り、言い逃れ

の言葉には行き詰まっていることを知る」と述べている。其の所を知る」と言うのは、大いなる道から遠かったり近かったり、離れたり合わさったりする所以に遡るということである。でたらめで偏っていてよこしまで言い逃れをする言説についてその道を絶つてしまふと言わずに、そうした言説の所以を知ると述べているのは、思うに諸子百家の言説も、また大いなる道が散らばり広がり著されたものであるからであろう。經典を崇めながら修養に臨めば、諸子百家の作用を理解し、源を忘れバラバラにしてしまえば、道の本質の全体を失ってしまうのである。

右十四の二十

【訳注】

一 『尹文子』大道上に、「名有三科、法有四呈。一曰命物之名、方圓白黑是也。二曰毀譽之名、善惡貴賤是也。三曰況謂之名、賢愚愛憎是也。一曰不變之法、君臣上下是也。二曰齊俗之法、能鄙同異是也。三曰治衆之法、慶賞刑法是也。四曰平準之法、律度權量是也。」とある。

二 『韓非子』定法篇に「術者、因任而授官、循名而責實、操

殺生之柄、課羣臣之能者也。此人主之所執也。」とある。

三 「示劉第二」第三条に「名家者流、後世不傳。得辨名正物之意、則顏氏『匡謬』、丘氏『兼明』之類、經解中有名家矣。」と述べている。

四 公孫丑上。

【原文】

墨家「隨巢子六篇」、「胡非子三篇」、班固俱注「墨翟弟子」、而敘書在「墨子」之前^{〔注二〕}。「我子一篇」、劉向『別錄』云「爲墨子之學」^{〔注三〕}、其時更在後矣。敘書在「隨巢」之前、此理之不可解者、或當日必有錯誤也。^{〔注三〕}

右十四之二十一

【訓読文】

墨家の「隨巢子六篇」、「胡非子三篇」、班固俱に注して「墨翟の弟子」と、而るに書を叙して『墨子』の前に在らしむ。「我子一篇」、劉向『別錄』に「墨子の学を爲す」と云えば、其の時更に後に在り。書を叙して「隨巢」の前に在らしむるは、此れ理の解す可から

ざる者にして、或いは当日に必ずや錯誤有らん。

右十四の二十一

【現代語訳】

墨家の「随巢子六篇」、「胡非子三篇」について、班固はいずれにも注して「墨翟の弟子」と述べているが、書物を並べて『墨子』の前に置いている。「我子一篇」について、劉向『別録』に「墨子の学を行った」と述べるのであれば、その時期はそれらよりも更に後にあるということである。それなのに、書物を並べて「随巢」の前に置いているのは、理の解せないことであり、恐らくは当時誤りが生じたのだろう。

右十四の二十一

【訳注】

一 墨家類には六家八十六篇が著録されている。序文に「墨家者流、蓋出於清廟之守。茅屋采椽、是以貴儉、養三老五更、是以兼愛、選士大射、是以上賢、宗祀嚴父、是以右鬼、順四時而行、是以非命、以孝視天下、是以上同、此其所長也。及蔽者爲之、見儉之利、因以非禮、推兼愛之意、而不知別

親疏。」とある。墨家類六家のうち、「墨子七十一篇」は末尾に著録されている。

二 顔師古注所引。

三 諸書の並び順の問題について、『漢書藝文志条理』には、「按『墨子』書中稱子墨子、亦墨氏之徒所録。其衆徒幾徧天下、增長附益其書、不知凡幾、至其成書之時、已在隨巢、胡非、我子之後、故『七略』以之爲墨家之殿。」と述べ、章氏とは異なる見解を示している。本章第十四条注五を参照。

【原文】

道家祖老子、而先有『伊尹』『太公』『鬻子』『管子』之書^{〔注二〕}、墨家祖墨翟、而先有『尹佚』『田俅子』之書^{〔注三〕}、此豈著録諸家窮源之論耶。今按『管子』當入法家、著録部次之未審也^{〔注四〕}。至於『伊尹』『太公』『鬻子』、乃道家者流稱述古人、因以其人命書、非必盡出僞託、亦非以伊尹、太公之人爲道家也^{〔注五〕}。『尹佚』之於墨家、意其亦若是焉而已^{〔注六〕}。然則鄭樵所云、「看名不看書」、誠有難於編次者矣^{〔注七〕}。否則班、劉著録、豈竟全無區別耶。第『七略』於道家、敘黃帝諸書於老萊、鵬冠諸子之後、爲其後人依託、不以所託之人敘時代也

注七。而『伊尹』『尹佚』諸書、顧冠道墨之首、豈誠以謂本所自著耶。其書今既不傳、附以存疑之說可矣。

右十四之二十二

【訓読文】

道家 老子を祖とするも、先に『伊尹』『太公』『鬻子』『管子』の書有り、墨家 墨翟を祖とするも、先に『尹佚』『田俅子』の書有り、此れ豈に諸家を著録して源を窮むるの論ならんや。今按ずるに『管子』当に法家に入るべきも、著録部次の未だ審かならざるなり。『伊尹』『太公』『鬻子』に至りては、乃ち道家者流 古人を称述して、因りて其の人を以て書に命じ、必ずしも尽くは偽託に出づるに非ずして、亦た伊尹、太公の人を以て道家と為すに非ざるなり。『尹佚』の墨家に於けるや、意は其れ亦た是くの若きなるのみ。然らば則ち鄭樵の所云、「名を看て書を看す」は、誠に編次に難ずる有る者なり。否らざれば則ち班、劉の著録、豈に竟に全く区別する無からんや。第だ『七略』の道家に於けるや、黄帝の諸書を老萊、鵬冠の諸子の後に叙し、其の後人の依託為るも、託する所の人を以て時代を叙せざ

るなり。『伊尹』『尹佚』の諸書、顧だ道墨の首に冠するは、豈に誠に以て本より自ら著す所と謂わんや。其の書今既に伝わらざれば、附して存疑の説を以てすれば可なり。

右十四の二十二

【現代語訳】

道家は老子を祖とするが、『七略』では、『老子』の先に『伊尹』『太公』『鬻子』『管子』の諸書が置かれており、墨家は墨翟を祖とするが、『墨子』の先に『尹佚』『田俅子』の諸書が置かれており、これがどうして諸家の書物を著録して學術の源流を究めるといふ論になるうか。いま考えるに、『管子』は当然法家に収めるべきであるが、これは著録分類がなおよく考えられていないところである。『伊尹』『太公』『鬻子』の諸書については、道家の流れの者たちが古人について述べ、それに因んでその古人の名を書物の名称としたものであって、必ずしもすべてが偽託から生まれたわけではなく、伊尹、太公といった人々を道家と見なしているのでもないのである。『尹佚』の墨家におけるのも、

意図はそのようなことである。そうであれば、鄭樵が主張する、「書名を見て書物の中身を見ない」問題は、実際は目録を編み書物を並べる方法に問題があるということになる。そうでなければ、班固や劉向、劉歆が書物を全く区別しなかったということになってしまうのではないか。しかし、『七略』の道家類において、「黄帝」の名を持つ諸書を老萊、鵬冠といった者たちの後に並べており、後人が古人に依って書名に託したものであるのに、託された古人に従って時代順に並べてはいない。『伊尹』と『尹佚』の二書が、道家類、墨家類のはじめに置かれているのは、本当にもともと自身が著したものだと言うのだろうか。それらの書物はいまには伝わっていないので、存疑の言を付けておけば良いだろう。

右十四の二十二

【訳注】

一 「漢志」道家類は三十七家、九百九十三篇を著録し、「老子鄭氏經傳四篇（班固注『姓李、名耳、鄭氏傳其學』）」の前に、「伊尹五十一篇」「太公二百三十七篇」「辛申二十九篇」

「鬻子二十二篇」「筮子八十六篇」の五書を著録している。本章第十条を参照。

二 「尹佚」、底本は「伊佚」に作るが、嘉業堂本に従って改めた。「漢志」墨家類は、六家八十一篇を、「尹佚二篇」「田俅子三篇」「我子一篇」「隨巢子六篇」「胡非子三篇」「墨子七十一篇」の順に著録している。

三 「管子」について、劉向「別録」に「所校讎中管子書三百八十九篇、太中大夫卜圭書二十七篇、臣富參書四十一篇、射聲校尉立書十一篇、太史書九十六篇、凡中外書五百六十四、以校除復重四百八十四篇、定著八十六篇、殺青而書可繕寫也。……凡管子書、務富國安民、道約言要、可以曉合經義。向謹第錄上。」と述べる。また、『韓非子』五蠹篇に「今境内之民皆言治、藏商、管之法者家有之。」とある。「隋志」では、「管子十九卷」として法家類に著録し、以後、後世の目録はおよそ法家類に収めている。

四 本章第十条を参照。

五 尹佚は、姞姓。周初の太史。史佚とも称す。武王、成王、康王に仕え、尹国を治め、尹吉甫が後を継いだ。「漢志」の「尹佚二篇」班固自注に「周臣、在成、康時也。」とある。六 鄭樵『校讎略』見名不見書論に「編書之家、多是苟且、

有見名不見書者、有看前不看後者。『尉繚子』、兵書也。班固以爲諸子類、實於雜家、此之謂見名不見書。」とある。

七 「漢志」道家類に「老萊子十六篇」「鶡冠子一篇」が著録され、

その後に、「黃帝四經四篇」「黃帝銘六篇」「黃帝君臣十篇」(班

固自注云「起六國時、與老子相似也。」)「雜黃帝五十八篇」(班

固自注云「六國時所作、託之力牧。力牧、黃帝相也。」)が

著録されている。

【原文】

六藝之書與儒家之言、固當參觀於「儒林列傳」^{〔注二〕}、

道家、名家、墨家之書、則列傳而外、又當參觀於莊周「天

下」之篇也^{〔注三〕}。蓋司馬遷敘傳所推六藝宗旨、尙未究

其流別^{〔注四〕}。而莊周「天下」一篇、實爲諸家學術之權衡、

著錄諸家宜取法也。觀其首章列敘舊法世傳之史、與『詩』

『書』六藝之文、則後世經史之大原也^{〔注五〕}。其後敘及

墨翟、禽滑釐之學、則墨支墨翟弟子、墨別相里勤以下諸人、

墨言禹湮洪水以下是也、墨經苦獲、己齒、鄧陵子之屬、皆誦墨經

是也、具有經緯條貫^{〔注六〕}、較之劉、班著錄、源委尤爲

秩然、不啻「儒林列傳」之於「六藝略」也。宋鉞、尹

文、田駢、慎到、關尹、老聃以至惠施、公孫龍之屬^{〔注七〕}、

皆諸子略中、道家名家所互見。然則古人著書、苟欲推明大道、未有不辨諸家學術源流、著錄雖始於劉、班、而義法實本於前古也^{〔注七〕}。

右十四之二十三

【訓読文】

六藝の書と儒家の言とは、固より当に「儒林列伝」に參觀すべく、道家、名家、墨家の書は、則ち列伝而外、又た当に莊周「天下」の篇に參觀すべきなり。蓋し司馬遷叙伝の六藝の宗旨を推す所は、尙お未だ其の流別を究めず。而るに莊周の「天下」一篇は、実に諸家學術の權衡を爲し、諸家を著録するに宜しく法を取るべきなり。其の首章に旧法世伝の史と、『詩』『書』六藝の文とを列叙すれば、則ち後世の經史の大原なるを觀す。其の後叙して墨翟、禽滑釐の學に及べば、則ち墨支墨翟の弟子、墨別相里勤以下の諸人、墨言禹湮洪水以下是れなり、墨經苦獲、己齒、鄧陵子の屬、皆墨經を誦するは是れなり、具さに經緯條貫有り、之を劉、班の著録に較ぶれば、源委尤も秩然を爲し、尙だに「儒林列伝」の「六藝略」に於いてするのみならざるなり。宋鉞、尹文、田駢、

慎到、閔尹、老聃以至惠施、公孫龍の属は、皆諸子略中、道家名家に互いに見ゆる所なり。然らば則ち古人書を著すに、苟しくも大道を推明せんと欲すれば、未だ諸家學術の源流を辨ぜずんばあらず、著録は劉、班に始まると雖も、義法は実に前古に本づくなり。

右十四の二十三

【現代語訳】

六藝の書籍と儒家の言説は、当然「儒林列伝」を参照すべきであるが、道家、名家、墨家の書については、列伝の他、更に『莊子』天下篇を参照すべきである。考えるに、司馬遷は『史記』叙伝において六藝の主旨を推しはかっているが、まだその源流は究められていない。しかし、莊周の「天下」篇は、実に諸家の學術の比較整理をしており、諸家を著録するには則るべきである。そのはじめに旧来の法規や代々伝承された記録と、『詩』や『書』などの六藝の文とを列べ論述し、後世における経史の大いなる源であることを示している。その後、墨翟、禽滑釐の學術に言及し、墨家の支流墨翟の弟子である、墨家の別流相里勤以下の諸人である、墨

家の言説「禹湮洪水」以下の言がそうである、墨家の書苦獲己爾、鄧陵子の輩が、皆墨子を誦したというのがそうであるについて、きちんと経緯、条理が示され、劉氏と班氏による著録と比べると、源、流れがとりわけ秩序立っており、『莊子』天下篇と「諸子略」には「儒林列伝」の「六藝略」に対する以上のものがある。また、「天下」篇に挙がる宋鉞、尹文、田駢、慎到、閔尹、老聃、そして惠施、公孫龍などは、いずれも諸子略において、道家や名家などにそれぞれ見えるものである。このように、古人は著述して、大道を推して明らかにしようとする以上、諸家の學術の源や流れを明らかにしないわけにはいかなかったのであって、書物を著録することは劉氏と班氏に始まるとはいっても、正しく定まった方法は実のところ古代に由来するのである。

右十四の二十三

【訳注】

一 所謂正史に収められる図書目録である史志に対して列伝が補う関係にあることは、章学誠の度々説くところである。「漢志六藝第十三」第三条に、「藝文雖始於班固、而司馬遷

之列傳、實討論之。觀其敘述戰國、秦、漢之間、著書諸人之列傳、未嘗不於學術淵源、文詞流別、反復而論次焉。劉向、劉歆、蓋知其意矣。故其校書諸敘論、既審定其篇次、又推論其生平、以書而言、謂之敘錄可也、以人而言、謂之列傳可也。」また、「藝文一志、實爲學術之宗、明道之要、而列傳之與爲表裏發明、此則用史翼經之明驗也。而後人著錄、乃用之爲甲乙計數而已矣、則校讎失職之故也。」また、「讀六藝略者、必參觀於儒林列傳、猶之讀諸子略、必參觀於孟荀管晏、老莊申韓列傳也。」とある。

二「補校漢藝文志第十」第三条に、「『漢志』最重學術源流、似有得於太史敘傳、及莊周『天下』篇、荀卿『非十子』之意。」とある。また、本章第十条及び第十一条を参照。

三「史記」太史公自序に、「易著天地陰陽四時五行、故長於變、禮經紀人倫、故長於行、書記先王之事、故長於政、詩記山川谿谷禽獸草木牝牡雌雄、故長於風、樂樂所以立、故長於和、春秋辯是非、故長於治人。是故禮以節人、樂以發和、書以道事、詩以達意、易以道化、春秋以道義。撥亂世反之正、莫近於春秋。」とある。

四 本章第十一条訳注六を参照。なお、章学誠の指摘する箇所は、従来、『莊子』のテキストの成立を考える上でしばし

ば問題視されるところであり、馬叙倫は、「詩以道志」以下六句、疑古注文、傳寫誤爲正文。」と述べ（『莊子義証』）、また、金谷治は六経を列挙している点において、「天下篇」を先秦末から漢初にかけて成立したものと考えている（『莊子』天下篇の意味）、『文化』第十六卷第六号、一九五二年）。

五『莊子』天下篇に次のようにある。「百家性而不反必不合矣。後世之學者、不幸不見天地之純、古人之大體、道術將爲天下裂。不侈於後世、不靡於萬物、不暉於度數、以繩墨自矯而備世之急。古之道術有在於是者、墨翟、禽滑釐聞其風而說之、爲之大過、已之大循。作爲非樂、命之曰節用、生不歌、死無服。墨子汜愛兼利非鬪、其道不怒。又好學而博、不異、不與先王同、毀古之禮樂。黃帝有咸池、堯有大章、舜有大韶、禹有大夏、湯有大濩、文王有辟雍之樂、武王、周公作武。古之喪禮、貴賤有儀、上下有等、天子棺槨七重、諸侯五重、大夫三重、士再重。今墨子獨生不歌、死不服、桐棺三寸而無槨、以爲法式。以此教人、恐不愛人。以此自行、固不愛己。未敗墨子道。雖然、歌而非歌、哭而非哭、樂而非樂、是果類乎。其生也勤、其死也薄、其道大觔、使人憂、使人悲、其行難爲也、恐其不可以爲聖人之道、反天下之心、天下不堪。墨子雖獨能任、奈天下何。離於天下、其去王也遠矣。墨子稱

道曰、『昔禹之湮洪水、決江河而通四夷九州也、名山三百、支川三千、小者無數。禹親自操耨耜而九雜天下之川、腓无胈、脛无毛、沐甚雨、櫛疾風、置萬國。禹大聖也而形勞天下也如此。』使後世之墨者、多以裘褐爲衣、以跣躡爲服、日夜不休、以自苦爲極、曰、『不能如此、非禹之道也、不足謂墨。』相里勤之弟子、五侯之徒、南方之墨者苦獲、己齒、鄧陵子之屬、俱誦墨經、而倍謫不同、相謂別墨、以堅白同異之辯相譬、以觭偶不侔之辭相應、以巨子爲聖人、皆願爲之尸、冀得爲其後世、至今不決。墨翟禽滑釐之意則是、其行則非也。將使後世之墨者、必自苦以腓无胈脛无毛相進而已矣。亂之上也、治之下也。雖然、墨子眞天下之好也、將求之不得也、雖枯槁不舍也。才士也夫。」諸子略墨家類が著録する六家八十六篇の書については、本章第二十二條訳注二を参照。

六『莊子』天下篇に次のようにある。「不累於俗、不飾於物、不苟於人、不忤於衆、願天下之安寧以活民命、人我之養畢足而止、以此白心、古之道術有在於是者。宋鉞尹文聞其風而悅之、作爲華山之冠以自表、接萬物以別有爲始、語心之容、命之曰心之行、以軻合驪、以調海內、請欲置之以爲主。見侮不辱、救民之鬪、禁攻寢兵、救世之戰。以此周行天下、上說下教、雖天下不取、強聒而不舍者也、故曰上下見厭而

強見也。雖然、其爲人太多、其自爲太少、曰、『請欲固置五升之飯足矣、先生恐不得飽、弟子雖飢、不忘天下。』日夜不休、曰、『我必得活哉。』圖傲乎救世之士哉。曰、『君子不爲苛察、不以身假物。』以爲无益於天下者、明之不如已也、以禁攻寢兵爲外、以情欲寡淺爲內、其小大精粗、其行適至是而止。」なお、宋鉞について、馬國翰は「漢志」諸子略小説家類に著録される「宋子十八篇」の輯本を編纂して、「宋鉞、孟子」作宋輕、韓非作宋榮子、要皆是一人也。『漢志』小説家『宋子十八篇』、隋唐志不著目、佚已久。」と述べ、「宋子十八篇」に附された班固自注には「孫卿道宋子、其言黃老意。」とある。尹文は、名家類に「尹文子一篇」として著録され、班固自注に「說齊宣王。先公孫龍。」とある。田駢は、道家類に「田子二十五篇」として著録され、班固自注に「名駢、齊人、遊稷下、號天口駢。」と述べられる。慎到は、法家類に「慎子四十二篇」として著録され、班固自注に「名到、先申韓、申韓稱之。」と述べられる。關尹は、道家類に「關尹子九篇」として著録され、班固自注に「名喜、爲關吏、老子過關、喜去吏而從之。」と述べられる。老聃については、本章第九條を参照。惠施は、名家類に「惠子一篇」として著録され、班固自注に「名施、與莊子同時。」と述べ

られる。公孫龍は、名家類に「公孫龍子十四篇」として著録され、班固自注に「趙人。」とある。